SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

国語科授業案：教科で育みたい人間像「言葉を大切にして、自らの思いを表現していく人」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若林, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00029486

国　語　科　授　業　案

教科で育みたい人間像　「言葉を大切にして、自らの思いを表現していく人」

授業者　若　林　　卓

1　日　時　　令和４年10月14日（金）　第１時　10：20〜11：10
2　学　級　　１年Ｂ組　（１年Ｂ組教室）
3　題材名　　**トロッコ　―「つながり」から考える―**

4　本題材で願う学び

情景描写をもとに大人の良平と８歳の体験のつながりを読みとり、主題について考えることを通して、細かな描写のつながりにも目を向け、作品における描写の意味やもたらす効果などについて立ち止まって考えることで、それらを手がかりにして自分の考えを広げたり、深めたりすること。

（学習指導要領との関連：〔知識及び技能〕⑴ウ、〔思考力、判断力、表現力等〕Ｃ⑴イ、オ）

5　題材観

⑴　情景描写の魅力

日々の生活に煩労し、少し自分の心を労わりたいと思う日には、決まってわたしは映画『ショーシャンクの空に』を観ることにしている。不条理な運命に翻弄されつつも、決して希望を捨てず前を向いて生きるアンディとレッド。海辺で二人が再会するラストシーン、爽やかな白いシャツを着た二人が抱擁する向こうには、波打つ透き通った水色の海と果てしなく続く紺碧の空が広がっていて、もう自分たちは自由なのだと、塀も監視もないこの限りない世界こそがわたしたちの望んでいたものなのだと、そんな二人の思いが聞こえてくるようである。エンドロールの文字をぼんやりと眺めながら、そこでグッと熱いものが込み上げる。

このように、わたしたちは物語を味わう際、そのストーリー性だけでなく、綿密に作りこまれた情景にも引き込まれているのかもしれない。情景は登場人物たちの心情と響き合い、その世界をよりいっそう豊かにし、わたしたちの心を動かすのである。それは、映画だけでなく、ドラマやアニメ、音楽や漫画、そしてもちろん、文学の世界においても同じ役割を担っている。わたしたちが本を読みすすめていくときの、ドキドキ感や爽快感、喜びや悲哀といった心が動く瞬間には、いつもそこに情景描写があるのではないだろうか。

しかしながら、映画鑑賞と読書とで異なる点が一つある。それは、映画であれば映像が脳にストレートに届くため、情景は自然と脳の中に映し出されることとなる。しかし、読書の場合、脳の中に送られるのは、映像ではなく文字である。作者が施した描写を、登場人物の心情と響き合うように脳内で変換し、味わうことができるかどうかは、読者の読みに委ねられていると言える。

⑵　これまでの子どもの学び

これまで子どもたちは、作品を読み味わう際、自分たちでつくりあげた問いを追求することを通して、本文の描写に基づきながら自分の考えを広げたり深めたりしてきた。今江祥智『竜』では、「三太郎の心情が変化したのはいつだろう」という問いに対して、「きれいな緑色のあぶく」という描写に着目したり、「気の弱い微笑」と「気の弱そうな苦笑い」という描写を比較したりしながら、物語の世界に入り込み、読みを深めていった。宮沢賢治『オツベルと象』では、「『オツベルと象』のおもしろさはどこにあるのか」という問いを追求していくために、語り手の存在や比喩表現、オノマトペなどの描写に着目し、物語の世界からは一歩引いて俯瞰（ふかん）しながら、作品の魅力について考えを深めていった。

いずれの授業においても、初読では見過ごしてしまった描写を追求していく中で丁寧に拾い、立ち止まってその言葉の意味を考えたり、作者がその言葉を施した意図を考えたりしてきた。そのたびに、子どもたちは、自分自身の読みが更新されていく感覚を実感していた。

> ・自分の考えが深まったと思う描写は主に二つあります。一つめは、「あぶく」の表し方です。一回や二回読んだだけではあまり気にとめませんでしたが、「三太郎の変化」を考えていく上で、大きな手がかりになることに気づいたからです。
>
> （『竜』最終追求より）

このように、何度も本文の言葉に立ち返り、仲間と共に語り合いながら、言葉の世界に浸ることを繰り返すことで、言葉に対する感覚をより研ぎ澄ましていくことを大切にしてきた。

⑶ 『トロッコ』の魅力

「薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……」そう結ばれた最後の一文を読み終えたとき、読者の目の前にその情景が広がり、心の中に、暗澹(あんたん)たるものが立ちこめ、良平の気持ちに思いを馳せたくなる。芥川龍之介らしさが溢(あふ)れる本題材は、長年教科書に掲載され、多くの魅力が詰まった作品である。この一文を含む、大人になった良平が書かれた最後の４行の存在（以下、大人パート）は読者に強い印象を与える。この大人パートを読むまで読者は、８歳の良平を主人公とした物語という認識で話を読みすすめていく。それが突然の大人パートにより、ガツンと頭を揺さぶられるような感覚に陥り、読者自身が必然的にこの作品を見つめ直し、いくつもの疑問が生まれる。そして、もう一度８歳の体験を読み返したいという思いが自然と湧き上がり、物語世界の中と外を往還しながら読むことになる。あれだけの文章量を用いて書かれている８歳の体験は、すべて、この大人パートに意味をもたせるためのものであるとも言える。大人パートをどのように読み解き、作品の主題をどのようにとらえるかを考えていくことが、作品の本質に迫っていくことであり、『トロッコ』の魅力である。

①大人になった良平と８歳の体験のつながり

この大人パートにおいて、ひときわ違和感を抱く表現が、「全然なんの理由もないのに？」である。この問い返しがあることにより、良平がそのときを思い出すのには、何らかの理由があるのだろうという思いを読者は抱かざるを得ない。良平自身に自覚はないのかもしれないが、二つの時をつなぐ何かが心の深層部分にあることが考えられる。では、そのつながりとは何か。描写を丁寧に追っていくことで、以下の三点のつながりを見いだすことができる。

ア　憧れや喜びは、一瞬にして恐怖や苦労に変わってしまう経験

大人パートでは、「良平は二十六の年、妻子と一緒に東京へ出てきた。」とある。そこからは、自分の将来に夢と希望を抱き上京してきたことが想像される。しかし、「今では、ある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。」からわかるように、大人の良平は、薄給であり、将来性の見込めない仕事をしている。また、「塵労に疲れた」から、現在の状況は、良平の望んだものではなく、今日に至るまでに、思うようにいかず苦労してきたことがわかる。その様は、トロッコに乗ったときの経験と重なる。はじめは、「両側のみかん畑に、黄色い実が幾つも日を受けている。」「みかん畑の匂いをあおりながら、ひた滑りに線路を走り出した。」「良平は羽織に風をはらませながら、」から、憧れのトロッコに乗ることができた爽快で喜び溢れる気持ちが生き生きと伝わってくる。しかし、それもそう長くは続かない。竹やぶのところで初めてトロッコに「重い」という形容がつくこととなる。明らかに良平のトロッコに対する気持ちが、憧れの物からただそこにある物という認識へ変化したことがわかる。それをきっかけに、「竹やぶはいつか雑木林になった。」「赤さびの線路も見えないほど、落ち葉のたまっている場所」と、次々に心の違和感を表す描写が続き、「今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。」ところで、はっきりと良平は不安を自覚するのである。良平の内面が刻々と変化していく様は、読者もハラハラとし、胸が苦しくなってくる。その胸の苦しさが大人パートの「塵労」や「薄暗い」につながることに、後々読者は気づくことになるのである。

イ　困難な状況に見舞われ、誰にも助けてもらえない世界に放り出され、自分で道を切り拓いていかなくてはならない状況

大人パートの「塵労に疲れた」から、大人の良平は日々の生活に苦労し、何かしらの鬱屈した感情が溜まっていることがわかる。しかし、「妻子と一緒に東京へ出てきた。」とあり、両親とは一緒に居ないことがわかる。つまり、大変なことがあっても、守ってくれる存在はいなく、困難を自分で切り拓いていかなくてはならない状況である。これらの状況も８歳の体験と重なる。土工を頼りにしていたにも関わらず、「われはもう帰んな。」の一言により、突然頼れる存在がいなくなる。自分の力で帰らなくてはいけないという思いが良平の心を覆いつくし、泣くこともせず、「無我夢中」で「左に海を感じながら」、家をめざそうとする。「夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかかっていた。」からは、あたり全体が暗くなり、良平の孤独感が一層強まっていく心の動きが読み取れる。

また、一人になる現実を突きつけられるまでの、それを予感していながらも行動に移せない弱い心の様も読み取れる。「切り崩した山を背負っている、わら屋根の茶店」では、帰ろうともせず悠々としている土工に対して良平は苛立つ。また、それまで何度もトロッコを視界に入れていたはずなのに、気づくことのなかった「トロッコには頑丈な車台の板に、跳ね返った泥が乾いていた。」ことにもここで気づく。これまで憧れであったために、気にもとめていなかったものが、ここへ来て見えるようになったことからも、追い込まれた気持ちになっていることがわかる。次の「同じような

茶店」では、先ほどの茶店とは異なり、土工たちの様子が全く書かれていない。まわりを観察することすらできない良平の心の余裕のなさを感じる。その後の「花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。」様は、増幅した焦燥感がひしひしと伝わってくる。しかし、良平は、その不安を土工にぶつけることなく、トロッコを蹴る、押してみるといった意味のない行動に出ているのである。そういった、現実から目を背け、わかっていながらも行動に移せない姿も、今の状況に至った大人の良平と重なるのかもしれない。

ウ　大声に泣き続けたときの「足りない気持ち」と、これからの良平を暗示している「薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……」

足りない気持ちとはどのような気持ちなのだろうか。８歳の良平の心情はこの半日の中で実に大きく揺れ動いた。憧れや喜びが一瞬にして不安や恐怖へ変わってしまうこと。誰にも助けてもらえない世界に放り出され、自分で道を切り拓いていかなくてはならない状況があること。そのような世界に身を置いたにも関わらず、帰ることを土工に促す行動に移せない自分がいたこと。それら８歳の良平にとっては正体不明の説明できない様々な感情が、足りない気持ちに隠されていたのではないだろうか。大人の良平が予感する将来は薄暗く、やぶに囲まれた坂のある道である。それは、自分の足で歩まなければならない道であり、ましてや妻子を抱える身では逃げ出すこともできず、余計に心の鬱屈は募っていく。それはあのときの足りない気持ちとの重なりを感じる。

このように、以上三点のつながりを見いだすことができる。このつながりがあるからこそ、大人の良平はそのときのことを思い出すのだろう。

②主題とトロッコが意味するもの

大人になった良平と８歳の体験のつながりを見いだした読者は、トロッコが意味するものに考えを巡らせることになる。トロッコの意味するものだけでなく、レールの意味するもの、レールではない一筋の道の意味するもの。それが断続していることの意味するもの。トロッコで走るということの意味、トロッコを降りて走るということの意味にも考えを巡らせるだろう。そして、読者はそれらを人生と重ね合わせていくことになる。レールの勾配や様々な道のように、人生は幸せなときもあれば、そうでないときもある。トロッコのように何かに守られて進むこともあれば、そこから放り出されて自分で歩んでいくべきこともある。敷かれたレールを走るトロッコから降りれば、あとは自分で歩んでいくしかないのである。

そして、芥川は「薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……」と結び、作品を終えている。突然現れた景色を、読者はただの景色として見ることはできないだろう。芥川の施した余韻の中で、良平の心情と重ね合わせ、良平の人生と向き合わざるを得ない情景描写である。もしかしたら、芥川は、自身が置かれている状況や抱いている思いを作品に吹き込んだのかもしれない。一筋の道の断続は困難なのか、それとも誰かの救いなのか。読者自身も、自分の体験や思いをこの作品と重ね合わせ、自分なりの人生観を広げていくことになる。それが、本作品を味わい楽しむことの一つだろう。

⑷　本題材で願う子どもの姿

本題材を通して子どもたちには、自分たちがつくり上げた追求テーマに基づき、視点をもって文章を読み返し、語り合いながら読みを深め、主題に迫っていってほしいと考えている。その際、過去と現在の描写を関連づけるなど、描写を丁寧に読むことで、『トロッコ』という作品においての描写の意味やもたらす効果などについて、立ち止まって考え、それらを手がかりにして自分の考えを広げたり、深めたりしていく姿を期待する。

ともすると、情景描写は、心情描写や行動描写に比べ、見過ごしてしまいがちである。だからこそ、立ち止まって着目し、新たな発見があったときには、子どもたちは驚きと共に、胸を震わし、その目で見た言葉は、光り輝いて見えるのかもしれない。

- 帰り道の焦燥感は、行きの「みかん畑」の描写があるからこそ、より不安で切なく感じるのかもしれない。
- 本当だ。ここで初めて「重いトロッコ」になる。今まで気づかなかった。良平のトロッコに対する思いが変わっていることがわかる。
- 初めて読んだときには気にもとめていなかったけれど、「薄暗いやぶや坂のある道」と「夕焼けの下日金山の空も、もうほてりが消えかかっていた。」がつながっているような感じがする。もしかしたら、他にもそういうつながりの描写があるのかもしれない。

このような感覚を味わった子どもたちは、一つの言葉から読みが更新されていくことの価値を実感するのではないだろうか。

描写に着目することは、あくまでも自分の考えを深

めたり、主題に迫ったりするための手段である。しかし、心のどこかで、トロッコを読み味わった子どもたちの中に、描写と向き合うことで心が動いた感覚が残り、その後の読書活動にも影響を与え、情景描写に自然と着目し、読書を豊かに味わう子どもが増えていったら素敵である。それが、わたしたちのめざす、言葉の世界に浸り、言語感覚を磨くということなのだろう。

6　題材構想（全９時間）

⑴ 『トロッコ』を読んだ感想を交流し、追求テーマを決めよう（２時間）
⑵ なぜ大人の良平は、そのときの彼を思い出すのか（３時間）
⑶ 大人の良平が思い出す「そのとき」とはいつのことだろう（２時間）
⑷ 題名「トロッコ」に込められた意味について考えよう（２時間）

7　題材構想にあたって

本題材で願う姿を生み出すために、題材を通して、子どもたちが描写に立ち止まって向き合うことのできる構想をしていく。描写に立ち止まって向き合える場面を意図的に組み込み、繰り返していくことで、子どもたちが一つの言葉のもつ価値を実感し、言葉をもとに、自分の考えを広げたり深めたりしていけると考える。そのために授業者が大切にすることを、以下に三点挙げる。

まず、子どもたちと作品が出会ったあと、作品に対する子どもたちの興味や疑問をもとにしながら、子どもたちとともに追求テーマをつくりあげる。その際、①子どもたちの思い（興味や疑問）を大切にしたものであること②本文の描写に立ち返ることで追求をおしすすめられるようなものであること、を意識したテーマであるように心がけたい。具体的には、子どもたちが、大人の良平と８歳の体験のつながりを見いだしていけるものとしたい。そして、つくりあげたテーマに沿って、子どもたちが個人追求、全体での語り合いをすることで、初読よりも一段階読みが深まってほしい。

次に、もう一段階読みを深めるために、これまでの読みを揺さぶる一手を授業者が打つことで、子どもたちの中から問いを生み出すこととする。その際、①子どもたちがこれまでの自分の読みを問い直すものであること、②本質に迫るものであること、を意識した問いであることを心掛けたい。具体的には、子どもたちが、「いつ」という視点をもって、大人の良平と８歳の体験のつながりを見つめ直すものとしたい。また、追求テーマに迫る子どもたちの中に解釈のズレを生むために、子どもたちの思いを大切にしながらも、授業者が意図をもって、追求テーマと問いの順序性を大切にする。そして、子どもたちが、生み出された問いについて、これまでの語り合いで出た意見をつなぎ合わせたり、視点をもって改めて本文を読み返したり、追求テーマと問いを往還したりしながら考えることで、子どもたちの読みがさらに更新されていくことを期待する。

最後に、本題材のまとめとして、『トロッコ』の主題に迫る自分の考えを最終追求として書くとともに、自分が立ち止まって向き合った描写についてもふり返られるような機会を設けることとする。それにより、言葉に対する自分の気づきや心の動きを大切にし、言葉の価値を自覚できる学びにしていきたい。それが、国語科の願う言語感覚を磨くことへとつながると信じている。

このような構想観をもって授業に臨むとき、予想される子どものあらわれと授業者のかかわりは以下の通りである。

⑴ 『トロッコ』を読んだ感想を交流し、追求テーマを決めよう（２時間）

授業者はまず、トロッコを知っているか問いかける。すると、子どもたちは、「線路を走る乗り物だ」「昔のもの。今ではあまり見かけないし、乗ったこともない」などと発言するだろう。また、トロッコを見たことのない子どももいることが予想される。

そこで、授業者は、トロッコの映像を見せ、今回の題材が『トロッコ』であることを伝え、範読する。

範読後、難しい語句の意味や当時の時代背景などについて、子どもたちと確認し合い、大まかな内容をつかむ。そして、子どもたちに思ったことや感じたこと、疑問などを追求用紙に書くよう伝える。その初読の感想を交流していく際には、以下のような発言があるだろう。

・良平の気持ちがわかる描写がたくさんあり、楽しんだり怖がったり、良平の気持ちの変化が激しかった。特に、帰りの場面はとにかくハラハラして、良平がどうなってしまうか心配だったが、無事に村に帰ることができてよかった。

・良平は、乗りたいという気持ちの大きさに負けて後から大変な思いをする。もう少し早く「帰りたい」と言っていればあそこまで苦労しなかった。しっかりと自分の欲を抑え、ほどほどにしないと後から自分が痛い目に合うと思った。
・26歳になっても忘れない印象深い出来事だったのだと思う。良平にとってトラウマになってしまっているのかも。
・無事に村に着いたから、ハッピーエンドで終わったようでいて、だけど、なんだか暗い印象を受ける作品だ。もしかしてハッピーエンドではないのかもしれない。

このように、子どもたちは様々な感想や疑問を語り合うだろう。特にその中で、大人パートに関する興味や疑問が多く出ることが予想される。具体的には以下のようなものである。

・何を伝えたい作品なのかよくわからなかった。８歳の話だけならばわかりやすいが、最後の部分が唐突に出てきてよくわからない。
・最後の４行はどういう意味なのだろう。
・「全然何の理由もないのに？」という書き方がひっかかる。きっと何か理由がありそうだ。
・なぜ良平は、８歳のときのことを思い出したのだろう。
・最後の４行と８歳の時の話にはどんな関係があるのだろう。
・「全然なんの理由もないのに？」というのは誰が言っているのだろう。
・８歳の時の出来事は良平のその後の人生にどう影響を与えたのか。
・なぜ26歳の時のことを書いたのか。書くにしても短すぎる。８歳の体験に対してほんの数行しか書いていないけれど、すごくインパクトのある場面だ。
・「薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……」の意味がわからない。良平の頭の中なのか、実際にあるのか、比喩みたいなものなのか。何だろう。

子どもたちが気になったことや疑問を語り合う中で、「大人パートはおまけなのだろうか」「細々と一筋断続しているってどういうことなのだろう」といったことを授業者から問いかけることで、子どもたちの疑問はさらに渦巻いていくことになる。そこで、子どもたちの思い（興味や疑問）を大切にした追求テーマ「なぜ大人の良平は、そのときの彼を思い出すのか」を共有する。これを全体の追求テーマにすることで、子どもたちは、視点をもって本文を読み返し、これまで見過ごしてしまったような描写にも立ち止まって向き合うことができるだろう。

⑵　なぜ大人の良平は、そのときの彼を思い出すのか（３時間）

追求テーマを受け、子どもたちはそれぞれの切り口から個人追求を行っていく。以下のような視点から考えていくことが予想される。

【喜びが悲しみに変わる】視点
・「良平は羽織に風をはらませながら」と、最初は楽しんでいたのに、「あまり遠くに来すぎたことが、急にはっきりと感じられた」あたりから不安や恐怖を感じることになり、気持ちの変化が激しいことがわかる。それが強く印象に残っているから思い出すのだと思う。
・「命さえ助かれば。」や「大声で泣き続け」など、あれだけつらい思いをしたので、好きで憧れだったトロッコが、嫌なものになったのかもしれない。だから、余計につらく、嫌な思い出として思い出すのだろう。

【悲しみのみに着目する】視点
・８歳の体験の悲しい気持ちが大人の良平と似ているから思い出す。「花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。」「必死に駆け続けた」から、どんどん不安になっていくのを感じる。不安だけでなく、悲しみも感じていて、大人の良平と重なっている。
・「命さえ助かれば」と、命の恐怖さえも感じた出来事である。忘れたくても忘れられない思い出になっている。嫌な思い出は思い出したくないけれど、印象が強いぶん、どうしても思い出してしまうのだろう。

【誰にも助けてもらえない】視点
・土工と一緒に帰れると思っていたが、「われはもう帰んな。」と、そうではない現実が待っていた。一人で帰らなくてはいけない現実を厳しくつきつけられ、つらかったから思い出すのだろう。
・誰かが助けてくれる子どもの世界から、誰にも頼れない大人の世界に入ってしまった。本来、８歳ならば、困ったときに助けてもらえるはずだけど、

そうではなかった。「無我夢中に」「涙がこみあげてくると」から、一人の大変さが伝わる。その状況が大人の良平と重なっているのではないか。
・一人だけの孤独を感じたぶん、両親のもとへ帰ってきたときには、安堵の気持ちで、「大声で泣き続け」たのだと思う。つらさが大きいが、ホッとする気持ちもある思い出だと思う。大人の良平が誰かの助けを求めているから思い出すのかもしれない。

個人追求を終えた子どもたちは、まわりと意見交換をしたのちに、全体追求に入る。子どもたちは、各々が追求した視点から語り合っていく。その際、描写をもとにして、大人パートと８歳の体験のつながりを以下のように見いだしていくだろう。

・大人の良平の「塵労に疲れた」今の状況の気持ちと、苦労しながら必死で帰らなくてはいけない帰り道の気持ちが共通していて、思い出す理由となっている。
・大人の良平の前にある「薄暗い」と「花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。」「夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかかっていた。」が、不安感を表しているという点で重なる。その重なりがあるから思い出すのだと思う。
・大人の良平の目の前にある「やぶや坂」と、８歳の良平が走って帰った帰り道「竹やぶ」「急な坂道」が似ているから思い出す。

子どもたちがそれぞれの視点からつながりを見いだし、思い出す理由に迫っている感覚をつかんだところで、授業者は、「みんなが言っている『思い出す』は、いつのことを言っているのか」と、子どもたちに問いかける。すると、子どもたちは、「それはもちろん、８歳の体験全部だろう」「わたしは帰り道のことだと思っていた」「最初のトロッコに乗っているところにも意味はあるはずだ」と、解釈のズレがあることを自覚するだろう。同じ土台で語り合っていたつもりが、ズレがあることに気づき、自分の考えを伝えたくなったり、相手の考えの根拠を聞いてみたくなったりする気持ちが膨らみ、自然とつぶやきが増えていくだろう。中には、「自分の読みは、本当に正しいのだろうか」と、自分の読みを問い直そうとする姿もあるだろう。子どもたちには、自分の読みを問い直すためにも、本文の描写に立ち返り、根拠をもとに語り合ってもらいたい。そこで、しばらく子どもたちのやりとりを見守ったのちに、「大人の良平が思い出す『そのとき』とはいつのことか考えてみよう」と、問いを共有する。

⑶　大人の良平が思い出すそのときとはいつのことだろう（２時間）

前時で共有された全体の問い「大人の良平が思い出す『そのとき』とはいつのことだろう」を受けて、子どもたちは、個人追求やまわりと意見交換をしたのち、全体追求において、以下のように語り合っていくだろう。

【８歳の体験すべて】
・憧れだったものが嫌なものに変わることは、最初から嫌いであるよりも、その反動が大きく、よりマイナスの気持ちになる。だからこそ、トロッコに憧れていた部分も含めて思い出すのではないか。
・ただ悲しいのではなく、楽しみにしていたことが思い通りにいかないという、モヤモヤとした気持ちが上京してきた今と重なるのだと思う。大人の良平の状況は悲しいだけとは少し違う。だから、帰り道だけではなく、楽しかったことも合わせて思い出している。
・大人の良平から孤独感を感じる。だから、土工が登場する場面、特に、「もう帰んな」と突き放されるときのことは思い出している。
・自分は「足りない気持ち」に注目した。「足りない気持ち」とは、きっと、憧れだったはずのトロッコが嫌いになってしまった気持ちだと思う。最初から嫌いだったら、そうは言わない。好きだけど嫌いという矛盾した説明しづらい感情があふれ出たのだと思う。それが大人の良平とつながっているから、やはり、思い出したのは８歳の体験すべてだろう。

【不安な気持ちが芽生えたところから】
・「重いトロッコ」「薄ら寒い海」「命さえ助かれば」などというように、良平の気持ちはどんどん不安に包まれていく。その徐々に不安や焦燥感が増していく感じを思い出していると思う。なぜならば、その感じが「塵労」とつながっている気がしたからである。塵が積もって、少しずつ苦しくなっていく感じ。
・「断続」が手がかりになるのかも知れない。道の断続は、歩こうとするけどうまくいかないことだと思う。そう考えると、帰りたいけれど帰れないときの「トロッコを蹴ってみたり…押してみたり」したモヤモヤした気持ちとつながり、そのときを思い出している。

【帰り道の走っているとき】

・一番つらいのは、帰り道の走っているときだと思う。だからつらい状況にある大人の良平は、「無我夢中」や「命さえ助かれば」という思いを抱いていた帰り道を思い出すのだと思う。

・「薄暗いやぶや坂のある道が細々と一筋断続している。」は、まさに帰り道と重なる描写だ。だから、帰り道のことを思い出している。ここにはトロッコは出てこない。だから、トロッコを降りてからのことを思い出している。

【大声で泣いているとき】

・「薄暗いやぶや坂のある道が一筋断続している。……」と「足りない気持ち」は関係がありそうだ。だから、「足りない気持ち」に迫られながら泣いているところをピンポイントで思い出している。あそこに８歳の時の良平の気持ちが凝縮されている。

・両親に会えてホッとしたときを思い出している。だからと言って、いい思い出ではない。大人の良平には守ってくれる人がいない。だから、守ってくれる両親のいる場面を思い出していると思う。

このように、子どもたちは、これまでの語り合いで出た読みや意見をつなぎ合わせたり、今までは見落としていた描写にも着目したりしながら、根拠をもって語り合い、読みを深めていくだろう。

しかし、意見に偏りがあり、語り合いの中で子どもたち同士の発言による新たな気づきが生まれなければ、子どもたちの読みは深まっていかない。その場合には、「最後に泣いたときの『足りない気持ち』とはどんな気持ちだろうか」や「『薄暗いやぶや坂が一筋断続している。…』で終わっているということはどういうことを意味しているのだろう」など、これまで子どもたちが着目していなかった視点に目が向くようななげかけをしたい。

さらに、「なぜ楽しかったことも思い出すのだろうか。自分は暗さしか感じられない大人パートと不安や焦燥感のある８歳の体験にだけ着目して考えていた」と、追求テーマと問いを往還する姿も見られるだろう。

また、語り合いの中で、物語を俯瞰（ふかん）しながら、以下のように構成の視点で考える子どもたちも出てくるだろう。

・『トロッコ』は、８歳が長くて大人パートが短い。だけど、メインは大人パートなのかもしれない。大人パートの内容こそが良平の気持ちの大事なところだと思う。

・初めて読んだときには、大人パートが急に出てきたような感じがして意味がわからなかったけれど、こうやって読んでいくうちに、不自然な展開じゃないように思えてきた。

・８歳の良平からみた「足りない気持ち」ではなく、大人の良平が８歳のときを振り返ってみて、あのときはわからなかったけれど、今になって考えてみると、自分は「足りない気持ち」で泣いていたんだな、と気づいたのだと思う。今の「塵労に疲れた」状況と重なるのが、当時の「足りない気持ち」なのかもしれない。実はこの物語は、ずっと大人の良平目線だ。

そこまで語り合った子どもたちは、大人パートに物語の軸足があることを理解し、大人パートと８歳の体験の位置づけの意味を認識していく。そこで、授業者は、「この作品は、大人パートが大事な部分なのだろうか」と問いかける。すると、子どもたちは「８歳の体験は、大人パートの薄暗さや苦労を引き立てるためにある」「８歳の体験が長いように感じるけれど、実はずっと大人の良平目線でもある」など、これまで読みとったことをもとに語り合うだろう。さらに授業者は、「それだけ大人パートが大事なのに、なぜ題名が『トロッコ』なのだろう」と問いかける。それにより、「確かにそうだ。大人パートがメインなら題名は『塵労』でもいいだろう」という思いが出ることや、「やはり８歳の体験がメインなのだろうか」「いや、それは違うと思う」というやりとりがなされることが予想される。そこで、「題名『トロッコ』に込められた意味はなんだろう」となげかけ、本題材のまとめとしたい。

⑷　題名「トロッコ」に込められた意味について考えよう（２時間）

子どもたちは、題名「トロッコ」に込められた意味について、「トロッコの勾配を、良平の気持ちの変化や良平の人生と重ね合わせる視点」や「『薄暗いやぶや坂のある道が一筋断続している。……』から感じる不安な未来に着目した視点」、「大人の良平の中にある孤独感に着目した視点」などの視点をもって、考えていくだろう。

また、その中で、「トロッコ」の表す象徴表現、「薄暗いやぶや坂のある道が一筋断続している。……」のもつ暗示、大人の良平の心の様を８歳の体験によって鮮やかに描き出している構成、語り手の存在などに

もふれていく。これらのことは、これまでの個人追求や語り合いの中でも子どもたちは着目しているだろう。芥川が『トロッコ』に施した仕掛けを見つめて味わうことで、子どもたちは、その感覚をこれからの読みにも生かしていくだろう。

そして、題名に込められた意味について考える子どもたちの語り合いは、以下のように作品の主題に迫るものになっていくだろう。

・この作品は、人生とはどういうものかということを伝えている。人生には、良いときもあれば、苦しいときもある。そして、人生の中で誰かに守られ、頼ることのできるのはほんの一時だけである。人生の大半は自分で切り拓いていかなくてはいけないものであり、その大変さと共に歩んでいく覚悟や自覚が必要だというメッセージが伝わる。
・人生のありようをあらわした作品だ。その中に、芥川の価値観が大きく映し出されていて、暗くもの寂しい雰囲気のする作品となっている。確かにこれからの人生、大変なことが多く、良平のように将来に希望をもてない苦しい思いをすることもあるだろう。しかし、わたしはもっと前向きに考えたい。自分の足で道を歩むというのは、やりがいや生きがいもあるだろう。わたしは、薄暗いやぶや坂のある細々とした道ではなく、明るく駆け出したくなるような道をつくり、そこをしっかりと踏みしめて歩んでいきたい。

このように、子どもたちは、人生に対する自分の考えも織り交ぜながら、主題について語り合っていく。何度も読みの更新がなされたことで、初読時よりも深い味わいで作品を楽しむことができるだろう。

そして、最後は個にかえり、主題について自分の考えを書きまとめることを最終追求としたい。その際、それだけでなく、どのような描写が自分の読みを深めるきっかけとなったか、どのような描写が自分の考えを揺さぶったか、どのような描写が作品を味わうことにつながったかということについてふり返ることも大切にしたい。

・はじめは、「トロッコの乾いた泥」という描写には全く注目しなかったけれど、全体共有でそこに注目している人の発言があった。今までそういう視点で読み取ったことがなかったため、新たな読み方に気づくことができた。一見、ただの状況や景色を説明しているだけに見える言葉にも、良平の心の変化が隠れていることを知ることができた。
・トロッコに乗っているときの楽しい感じも、無我夢中になってなんとか一人で帰ろうとする焦燥感も、とにかく生き生きと伝わってきて、良平だけでなく読んでいる自分も感情の変化が激しかった。それは、「みかん畑の匂いをあおりながら、ひた滑りに線路を走り出した。」や「今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。」といった、良平の心情が隠された描写があったからだと思う。
・読者をその世界に引き込む言葉は作品の中にたくさん散りばめられているということに気づいた。特に、「夕焼けのした日金山の空も、もうほてりが消えかかっていた」「薄暗いやぶや坂のある道が、細々と一筋断続している。……」など、読み過ごしてしまいそうな描写が、作品全体をなんだか切ないものにしていることに、あとから気がついた。これから読書をする際、そういう作品の世界を作り上げていく言葉に注目するようになるかもしれないと思った。

このような思いが子どもたちの中に芽生えれば、それは、『トロッコ』の読みを通して、言語感覚を磨いていたと言えるのかもしれない。言葉の価値を実感した子どもたちは、他の題材や実生活の中でも、言葉を丁寧に拾い上げ、言葉と向き合っていくだろう。そして、自分自身が言葉を使う際にも、言葉と向き合い、そこに丁寧に思いをのせるだろう。それこそがわたしたちの願う言葉を大切にすることであり、それは、子どもたちがありたい自分を思い描いている姿とも言えるのではないだろうか。これからも、子どもたちが言葉を大切にすることをささやかに願いながら、そっと授業を閉じたい。

参考文献：大塚　浩（2015）「中学校国語教科書教材研究―『トロッコ』の考察を中心に―」『静岡大学教育学部研究報告．教科教育篇』．
木下聡美（2022）「問いを生み出し・追求する三年間のカリキュラム構想」『第85回　国語教育全国大会　資料』．
田中実・須貝千里（2001）『文学の力×教材の力〈1〉中学校編１年』教育出版．
寺田　守（2002）「小説教材の読みに関する学習者論的研究―トロッコの場合―」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部，第51号．